

幼稚園におけるプロジェクト・スペクトラムの導入と保育者の省察（その1）

○中坪史典（琉球大学教育学部）

赤嶺優子（豊見城市立上田幼稚園）

問題設定

本発表は、一人の保育者（赤嶺）が自らの保育実践を省察する事例である。平成元年の教育要領改訂以降、幼児の自由の尊重と個の重視が主張された。この出来事を契機に教育現場では、「集団から個へ」「指導から援助へ」と幾つかの転換が模索されるようになり、そのことで保育者（赤嶺）は、幼児への対応に関して混乱を覚え始めたという。自由の尊重と個の重視という名のもとに、幼児の活動を放任し、彼らのやりたいようにやらせる保育、保育者の指導や働きかけを極力抑制し、見守ることに徹した保育、そうした実践に傾倒する状況に対して発表者（中坪）は、保育者（赤嶺）とともに従来の保育を問い直し、幼児の個性を尊重するための保育者の役割について考えることにしたのである。しかし、従来の保育を問い直すと言っても、決してそれは容易ではない。そこで発表者（中坪）は、保育者（赤嶺）にとって目新しいカリキュラムを提示し、その実践と従来の実践を対比することで、従来の実践を相対化することを試みた。それが幼稚園におけるプロジェクト・スペクトラムの理論と実践の導入である。幼児の潜在能力の発見を意図するこの実践を用いることは、上記の問題に対して有益であるのではないか、発表者（中坪）はそう考えたのである。研究・実践の概要は、次の通りである。

対象：豊見城市立上田幼稚園 5歳児クラス

期間：2003年6月～2004年2月（週2回）

時間：自由遊びの時間（8:30～10:00）

研究方法

幼児の認知行動に即して設定された8つの領域（機械と構成、科学、運動、音楽、数学、社会理解、言語、美術）に対応する22の活動を準備し、コーナー保育のような形態で、保育室の中に1日おきに4つの領域の活動スペースを設置した。幼児は自由遊びの時間を用いて、設置された領域における活動を自らの興味・関心に即して展開することができる。

幼児の活動の様子は、発表者（中坪）のゼミ生が観察メモで記録するとともに、各領域にテープレコーダーを配置した。保育者（赤嶺）には、ピンマイクを

付けてもらい、その音声情報を収集するとともに、一部の親に協力を要請し、ビデオカメラの撮影を担当してもらった。親に協力を要請した目的は、プロジェクト・スペクトラムの実践を親の教育参加の通路とすることで、保育者と家庭の連携を図るためである。幼児の潜在能力を発見するためには、親の役割が重要となる。以上の方法で収集されたデータをもとに、発表者（中坪）、保育者（赤嶺）、ゼミ生の間で、定期的（月2回程度）議論を展開した。

プロジェクト・スペクトラム

ところでプロジェクト・スペクトラムとは、ハワード・ガードナー（Howard Gardner）とデビット・フェルドマン（David Feldman）の研究グループが実施した、幼児期から児童期前半の子どもを対象とした教育カリキュラム開発プロジェクトであり、フェルドマンの非普遍化理論（Non-universal Theory）と、ガードナーのマルチ能力理論（Multiple Intelligences Theory）を基礎として、実践の中で練り上げられたものである。その名称のスペクトラムとは「それぞれの子どもの知能やスタイルは広範囲の分布（spectrum）のように表出する」ことに由来しており、「すべての子どもは一つまたは複数の分野において発達すべき潜在能力を有しており、それらを開花させることが教師や教育機関の責務である」と主張する。彼らの視点は、従来の発達心理学が一つの発達の認知モデルを普遍化し、精神診断テストや標準テストによる能力評価を一般的能力として扱うこと、従来のIQ概念の能力は言語や論理数学のみであり、それを一般的能力として扱うことに反対するものである。彼らは、子どもの認知行動に即して、8つの領域（前掲）を設定し、各々の領域において発揮される鍵となる能力（Key Abilities）を計31項目提起した（Feldman 1998；Gardner 1983,1999）。

実践の内容

本実践で準備した8領域における22の活動は、以下の通りである。これらはChen, Isberg & Krechevsky（1998）を参照するとともに、独自の活動も創作した。例えば、遠足の際に幼児がセミ取りに夢中になったこ

とから、セミの歌を歌う、セミにメッセージを綴る、セミの絵を描くなど、臨機応変に追加した。

〔機械と構成〕1) 壊れた時計の解体：壊れた時計を解体することで、内部の構造を知る。2) 鉛筆削り器の組立て：あるモノをもとの形に復元することで、部品繋がりや構造を知る。3) 粘土：思い描くものを粘土で作る。因果・機能的関係の理解、機械を操る力、細部の注意力、3次元物体の組立て、デザインや計画、仮説の検証などが鍵能力となる。

〔科学〕1) 水滴：和紙、画用紙、普通紙に色の付いた水滴を垂らし、模様や染み込み方の違いを観察する。2) 磁石：磁石の釣竿で魚を釣る。磁石に付く魚、付かない魚の違いを見極める。3) 影と光：太陽や懐中電灯で影を映し出す。光と影の繋がりや、影の動きを見る。仮説検証、比較対比、観察、空間の繋がり、理解などが鍵能力となる。

〔運動〕1) 真似：相手の動きやポーズを真似る。相手の身体の使い方のコツを掴む。2) 障害物競走：バット、フラフープ、飛び縄などを用いたレース。身体感覚を駆使して障害をクリアする。3) 動き：音楽に合わせてイメージされる動きや雰囲気表現する。身体制御、動きの生成、バランス感覚、体力、スピード、機敏さ、ムード表現などが鍵能力となる。

〔音楽〕1) 音の隠れん坊：仕切りの両側に楽器を置いて、相手が出した音を互いに当てる。2) コップの木琴：コップに水を入れて、木琴のように叩いて音を出す。音の変化や音色を知る。ピッチの区別、曲の再現、音の作成、作曲などが鍵能力となる。

〔数学〕1) 物真似ブロック：仕切りの両側に並べられた数字の順番を、相手のヒントを手掛かりに当てる。相手の言葉を頼りに、数の位置関係を把握する。2) 背比べ：自分や友達の背丈を計る。何センチの単位ではなく、紐の長さの違いで背の高さを認識する。相手と同様に頭の中に地図を描く力、作戦力、空間推測などが鍵能力となる。

〔社会理解〕1) 手形観察：紙の上に手形を押して虫眼鏡で観察する。人の手形と自分の手形を比較して自分の手を客観的に捉える。2) 糸電話：離れた相手と会話し、話したいことを言葉にして伝える。3) 指人形：人形を他人や自分に見立てて、話しかけたり相談をしたりする。自己理解、コミュニケーション、他者理解、対人問題の解決、熟考などが鍵能力となる。

〔言語〕1) 物語：ランダムに並べた絵をもとに、オリジナルの物語を作る。ランダムに与えられた情報を一つのストーリーに仕上げる。2) 読み聞かせ：好

きな本や紙芝居を友達同士で読み合う。相手に分かり易い言葉や口調で内容を伝える。3) 手紙：友達や家族に手紙でメッセージを伝える。自分の思いを文字にする。人を魅了する表現、協同性、独創的な書き方、巧みな言葉の使用、詩的表現などが鍵能力となる。

〔美術〕1) モデル画：人やモノをモデルに絵を描く。方向や角度によって描かれる絵の違いを感じる。2) 自然画：草花などの自然物を触ったり見たりして絵を描く。3) 手触り記録：身の回りのモノを集めて、ツルツルやヌルヌルなど、異なる感触を確かめる。写実的能力、細部の注意力、美術的認知力、異なる美術スタイルへの敏感さなどが鍵能力となる。

発見された幼児の潜在能力

プロジェクト・スペクトラムの実践を通して、数名の幼児の潜在能力が発見されるとともに、それに伴って、保育者（赤嶺）の省察が促進された。以下では、発見された幼児の潜在能力について論じる。

H斗（男児）：保育者（赤嶺）によるとH斗は、普段からおとなしく「ボーっとした子」と表現されていた。そのH斗は、「機械と構成」の領域に興味を示し、工具を用いて壊れた時計の解体に熱心に取り組むとともに、解体した後、それをさらに組み立て直すという作業を真っ先にやってのけた。その他、絵を描く活動（「美術」の領域）や、指人形を作る活動（「社会理解」の領域）では、唯一人、最後まで粘り強く作品を作り上げていた。こうした彼の姿は、保育者（赤嶺）にとっても意外な未知の側面であり、我々はH斗に対して、機械を操る力、細部への注意力などに卓越しており、持続力や粘り強さなども有しているのではないかと捉えるようになった。

S菜（女児）：保育者（赤嶺）によるとS菜は、普段から他の幼児と関わることは殆どなく、一人遊びに没頭する幼児であった。本実践においてもS菜は、「美術」の領域に向かって一人で絵を描くことが多かった。そのS菜がある日、「音楽」の領域に興味を示し、笛を吹きながら作曲したり、ハーモニカを吹きながらビデオカメラの前で自分をアピールしたりするなど、保育者（赤嶺）のイメージを覆す行為を見せたのである。そこで保育者（赤嶺）が積み木を用いて即興のステージを設置してみると、S菜は他の女児と一緒にステージに上がり、マイクを持って歌い始めた。こうした彼女の行為から、我々はS菜に対して、音楽の表現力や、自己アピールに卓越しているのではないかと捉えるようになった。